

共同的「子ども - おとな」意識形成に関する ナナメ関係の理論的・質的研究

遠藤, 野ゆり / ENDO, Noyuri

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

科学研究費助成事業 研究成果報告書

(開始ページ / Start Page)

1

(終了ページ / End Page)

4

(発行年 / Year)

2014-06

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 10 日現在

機関番号：32675

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2011～2013

課題番号：23730749

研究課題名(和文) 共同的「子ども - おとな」意識形成に関するナナメ関係の理論的・質的研究

研究課題名(英文) A logical and qualitative study of oblique relationship between children-adults; how collaborative consciousness can be brought up

研究代表者

遠藤 野ゆり (ENDO, Noyuri)

法政大学・キャリアデザイン学部・准教授

研究者番号：20550932

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,100,000円、(間接経費) 930,000円

研究成果の概要(和文)：子ども向け電話相談では、音声のみという対話の限界が電話の受け手の自己反省を促し、子どもに謙虚に向き合うという倫理の高まりを生むこと、こうした自己反省を促す装置として、イギリスでは、ボランティアの社会的立場の高さ、トレーニングの専門性等が用意されていることが明らかになった。また、子どもたちはナナメ関係を重ねると、初対面の他者や、縦関係の他者とも良好な関係が築ける、という仮説が立った。解釈のもととなる対話論については、対話を相手にゆだねざるをえない負荷や、受け手が相手の言葉を「待つ」という受動性の受け入れにおいて、倫理的高まりが顕著になることから、時間性と倫理の問題が関係するという仮説が立った。

研究成果の概要(英文)：In ChildLine an ethical rise of counselor to meet with children humbly and modestly is found through self-reflection which is brought out by limitation of only-voice-dialog. In UK, where ChildLine originates, the high social status of ChildLine volunteer and professional training system and so on are provided as devices to draw out their self-reflection. And we can set up a hypothesis that children can construct good relationship between others whom they meet first or by whom they might be told off or rated through a pile of experience to meet with others who never tell them off nor rate them, in other words, who are in an oblique relationship. We can also set up a new theory of dialog that the ethical rise is found in the taking burden to entrust all of dialog to partners and in the act of waiting for partners' words, in short, the ethical rise is connected to temporality.

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：教育学・教育学

キーワード：子ども向け電話相談 倫理的高まり 共同的な意識 対話論 チャイルドライン

様式 C-19、F-19、Z-19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

本研究の背景として、大きく2点が挙げられる。1点目は、地域共同体の変様が子どもとおとなの関係を変化させつつある、という点である。2点目は、1点目の問題について、子どもの問題は教育学的に研究されることが多いが、おとなが子どもをどのように捉えるのかということも含めた、両者の相互関係を捉える視点が必要になっている、という点である。以下、詳述する。

よく指摘されるように、近所づきあいや遠い親戚といった、ゆるやかな関係(本研究ではこの関係を「ナナメ関係」と呼ぶ)の体験において子どもたちは、親や教師といった、直接的な「縦」関係では体験しえないものを体験していく。このナナメ関係の体験は、縦関係のおとなが子どもたちを育てる際に、その育ちを支えるゆるやかで、かつ安定した基盤となりうる。すると、地域共同体の解体や変質が指摘される今日において、他者とのゆるやかなつながりを感じ安心して生きていくという無意識の営みが、子どもたちには困難になっていることも考える。

こうした状況は、子どもの側の問題だけではなく、子どもと関わるおとなの側にも生じているはずである。というのも、〈おとな-子ども〉関係は、おとなから子どもへの一方的な関係ではなく、子どもからおとなへの関係でもあるからである。すなわち、子どもとの関わりによっておとなもまた、共同的な意識を育ていけるのであり、そうした相互的な意識においてはじめて、「共同的」な関係が成立するからである。

以上の2点を背景に、共同体の在り方が変わりつつある今日、共同的な意識の形成のプロセスや現状、課題を明らかにすることが求められている。

2. 研究の目的

本研究は、ナナメ関係の他者との間接的関わりによる共同的意識の形成の過程と意義を、理論的、実証的に検証することを目指す。このために研究段階を3つに区分する。

1つめは、子どもの話を受容し傾聴するという、ナナメ関係の本質的な在り方を遂行する電話相談事業チャイルドラインの受け手ボランティア(約30名)に、三年間にわたる意識調査を行ない、間接的な支援に限定された関係の意義を対話論に基づき明らかにする。特に、子どもとの対話がおとなに及ぼす影響を明らかにすることが目的である。

2つめは、対話を支える様々な取り組みについて、福祉先進国でもあり、子ども電話相談事業の発祥の地でもあるイギリスの取り組みを明らかにする。というのも、子どもと同様におとなにもまた、安心、安全の保証された中での共同意識形成が必要だと考えられるからであり、イギリスの取り組みはこの点において秀でているからである。

3つめは、論理的研究として、おとなとの

対話が子どもたちにとってどのように体験されるのか、子どもたちの共同的な意識や、それを下支えするところの時間性にどのような変化を及ぼすのかをも明らかにする。なお、こうした研究をとおして、対話のもつ作用を現象学的に明らかにすること、すなわち哲学的な人間理解の研究にも寄与することを、同時に目指す。

3. 研究の方法

本研究は、その内容に応じて当初3部構成の研究方法を用意していたが、実際に研究を進めるにあたって、もう1つのフィールド調査を加え、4部構成になった。

(1)

1つめは、ボランティアへのヒアリング調査を行なうことである。この聞き取りは、あるNPOにて、協力してくれる受け手ボランティアに、半構造化面接で実施した。30名の受け手に、1回につき約1時間の聞き取りとなった。ヒアリングは録音し文字起こした。その内容についてテキスト分析を行ない、インタビューであるボランティアの倫理的な変化を中心に検討した。なお、研究当初は、3年間の追跡調査を予定していたが、実際には、経験年数による差というよりも、そのインタビューがもともと持っていた価値観の方がその変化に大きな影響を与え、倫理的な変容として現われることが明らかになったため、追跡調査を中止し、そのかわりに、聞き取り調査の対象を増やすことにした。

(2)

2つめとして、(1)のヒアリングの中で明らかになるのが、子どもとの真剣な対話であるがゆえにボランティアにかかる多大な負担である。そこで、ボランティアを精神的に、また物理的に守るための取り組みが、子ども向け電話相談事業を行なっているイギリスの団体ではどのように行なわれているのかを、現地調査した。そこで、日本と同じく受け手ボランティアにヒアリングを行ない、ボランティアの意欲の違いや研修制度への取り組み方の違いなどを明らかにした。

(3)

子どもたちにとっておとなとの関係がどのように体験されているかは、家庭以外の施設等で育つ子どもたちの日常や学校生活を、フィールド調査した。2年間にわたり、年に2回、大学生と子どもたちとの交流を続け、子どもたちが大学生との関係を形成していく様子をフィールド調査した。フィールド調査では、子どもたちの様子を記録にとどめ、また子どもと関わる職員や学校教員との面談を行なった。

(4)

テキスト分析を行なうにあたっての対話論の研究は、時間論の研究につながる事が確認された。そこで、現象学的な時間性的問題を含め、文献読解を行なった。

これらを統合し、時間論を含めた対話論に

基づき、ヒアリング調査の結果やフィールドワークの成果を分析していく。

4. 研究成果

本研究の結果、次の4点が明らかになった。

(1)

電話相談事業に従事するボランティアにおいては、音声のみの対話という限定的な状況が、いったんは子どもとの共同意識をもつことをむしろ困難にすることがある。というのも、この事業において電話の受け手は原則的に、対話の始まりから終わりまでを子どもにゆだねねばならず、子どもとの関係が常に不均衡にならざるをえないからである。さらには、子どもの中には、自らの抱える不安や傷ついた思いを、暴言や罵声といった、電話の相手への攻撃という形で吐露することもある。プロフェッショナルなカウンセリングのトレーニングを受けているわけではないボランティアにとって、このように子どもから傷つけられる体験は、ときに強い不安や心の傷となり、子どもとの共同意識はむしろそがれてしまう、といえる。

しかしながら、これらは、子どもを守り育てるといっておとなの自己認識をうちこわし、子どもに対して、いわば謙虚に向き合う姿勢をボランティアに形成することも明らかになった。子どもたちからの暴力や拒絶を、おとなに対してそのように自己表出するしかない子どもの在りようとしての理解や、さらにはそのように子どもたちをあらしめている一人のおとなとして自己認識が生じるにつれ、ボランティアは、子どもを育てて「あげる」といった役割認識は薄れ、対等な個人として子どもの語りへと向き合えるようになることを語る。

ボランティアになる前の研修で、こうした価値観の変容は、まず一度訪れる。「子どもにアドバイスは不要」といった説明によって、価値変換を迫られるボランティアが多い。しかしその段階での価値変換は、いまだ理論的なレベルにとどまっており、子どもからの暴力や拒絶を体験し、対話の形成の困難さを身に染みて理解することにより、電話の受け手には、それまでには見られなかった倫理的高まりが生じることが明らかになった。これは、自己反省によって次のシフトではよりよく子どもに関わろうという倫理的高まりであり、また同時に、自己反省によって自らの限界を見つめ、そこから、子どもへの立ち位置を根本的に変更していくという倫理的高まりである。

(2)

しかしこうした倫理的高まりは両刃の剣であり、電話の受け手はそのプロセスの中で、さまざまにショックを受けたり傷ついたりする。しかもそのプロセスの中で、回復の契機をもてず、ボランティアを途中でやめるケースもある。すなわち、ボランティアにとっては、自己反省を促すだけのショックと同時に、

そうしたショックを受けながらも自己反省を促し次のシフトへとつなげてもらえるだけのサポートとが必要になる。

こうしたサポートとして活用されるはずの、受け手への継続研修は、残念ながら、参加率が高くないのが現状である。こうした参加率の問題を含め、受け手の安心、安全感をどう支えながらどう自己反省を促すかが、日本のチャイルドラインの課題といえる。そこで本調査では、子ども電話相談事業のオリジナルであるイギリスで調査を行った。

イギリスのボランティアは、かなり明確なルールにのっとりた方法で、子どもたちに対処することが求められる。例えば、日本では曖昧な基準で実施される継続研修であるが、基本的にイギリスにおいては、この継続研修は、ボランティアを続けるための必須条件である。こうした義務化された制度であるが、実際にはボランティアの多くが、研修に参加することを自ら希望するなど、積極的な活用が見られる。ボランティアへのヒアリング調査においても、もっと多く研修に参加したい、というコメントも出ている。こうした積極性を支えるのは、ボランティアの社会的立場の高さ、トレーニングの専門性、また参加型のトレーニングである。さらには、イギリス全土で統一されたサービスを実施し、電話の回線がつながらず話せない子どもが出ないようにするのみならず、その回線通話率を常に数字で確認できるシステムの構築など、環境が整っているということが要因として大きい。

(3)

おとなの側にとっての共同意識形成のプロセスを研究する際に補完的に、子どもたちにとって親以外の関係がどのように体験されるのか、フィールド調査を行った。この大学生と子どもとの出会いは、基本的に一回きりであり、複数回参加する一部の学生を除けば、子どもたちは、一度しか会えない「お兄さん」「お姉さん」との関係構築。初回の子もたちが強い警戒心を示していたのに対し、子どもたちにとって、大学生との関わりそのものが慣れてくるにつれて、2回目以降、初対面の大学生とも自然な形で関わる子どもが増えていくことがわかった。ただし、子どもたちはそのつど進路を含めたそれぞれの問題を抱えており、子どもたちの立ち居振る舞いにはそうした問題が多大な影響を与えていることが推測されることから、子どもたちにとって大学生とのナナメ関係の体験がどれほどの作用力をもったのかは、明らかにはなっていない。

注目すべきなのは、こうしたナナメ関係を通して、教師という縦関係も、やわらかくなっていったという変化である。ここからは、ナナメ関係は、それとして子どもたちに意味があるだけでなく、縦や横といった他の関係形成にも大きな影響をもつものであることが推測される。ただしこれについても、学校の日常的な取り組みが子どもたちに変化を与え

ていることも十分考えられ、現段階では仮説にとどまる。

(4)

対話論でいわれる非対称性や非制限性が、現実的に共同意識にどのような影響をもたらすのかを文献をもとに考察し、インタビューで得られた語りの分析に用いた。対話論では、相手にすべてをゆだねねばならず、また相手からゆだねられたことを引き受けねばならないために、常に大きな負荷が語り手にはかかることが解明されている。本研究は、こうした負荷が、人間の倫理的な高まりを生じさせることを明らかにした。

また、倫理的な高まりが顕著になるのは、受け手が相手の言葉を「待つ」という受動性の受け入れにおいてである。すなわち、目の前にいる子どもをいま改善しようとする性急さが、教育の根本的問題の一つであるとするならば、いま相手を改善したり変化させたりすることができないという現状に、あるいは自分自身に耐えうる力とあいまって、こうした倫理的な高まりは生じることになる。こうした時間的な意識の変化は、子どもを、これから自ら伸び行く力を備えた存在として受けとめることを支え、こうした長いスパンで相手を待つという姿勢が、こどもとおとなが相互に、共同的に関わる基盤となりうることを示された。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕 (計7件)

①遠藤野ゆり、電話相談の受け手ボランティアの抱える課題と倫理的な高まり ヒアリング調査の予備的分析、査読無、キャリアデザイン学部紀要、第11巻、2014、pp.229-243

②遠藤野ゆり、商業高校における人間関係についてのインタビュー分析—卒業後をみずえた生きづらさに着目して—、査読無、生涯学習とキャリアデザイン、第11巻第2号、2014、pp.49-58

③遠藤野ゆり、養育環境が20代のキャリア形成を困難にする事例—サルトルの対自論に基づいた質的考察—、査読無、生涯学習とキャリアデザイン第11巻第1号、2013、pp.19-31

④遠藤野ゆり、インクルーシブ教育の課題とその乗り越え—定型発達者の認知多様性に関する聞き取り調査と天才論としての発達障害論とに基づいて—、査読無、生涯学習とキャリアデザイン、第10巻、2013、pp.85-101

⑤遠藤野ゆり、発達障害のある不登校児の集団への馴染みがたさについての現象学的考察—学校とフリースクールにおける共同性の違

いに定位した研究方法論—、査読無、法政大学キャリアデザイン学部紀要第10号、2013、pp.131-155

⑥遠藤野ゆり・大塚類、子どもがいきいきとする学級集団活動についての事例研究、査読無、山口大学研究論叢第61巻第3部、2011、pp.53-63

⑦遠藤野ゆり、対話論における倫理の問題について、査読無、山口大学研究論叢第61巻第3部、2011、pp.43-51

〔学会発表〕 (計1件)

①遠藤野ゆり、被虐待児への特別活動を通じた学校生活支援の課題と意義、子ども家庭福祉学会、2011年6月5日、熊本学園大学

〔図書〕 (計2件)

①遠藤野ゆり・大塚類、新曜社、あたりまえを疑え! 臨床教育学入門、2014、182 (pp.1-29,pp.61-75,pp.117-176)

②大塚類・遠藤野ゆり編著、他3名、創元社、エピソード教育臨床 生きづらさを描く質的研究、2014、172 (pp.3-31,p.90,pp.117-141,168-172)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

遠藤野ゆり (ENDO, Noyuri)

法政大学・キャリアデザイン学部・准教授

研究者番号：20550932